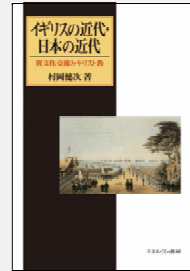


村岡健次 著

『イギリスの近代・日本の近代
——異文化交流とキリスト教』

先送りしがちな問題に立ち向かうということ

英米文学読者が英語文学に対象を広げると、最低三つのことに気づかされる。第一は、英米以外の国々において英語で執筆する作家が、20世紀から今に至るまで自国の近代化のプロセスを小説化し続けているということが、小説というジャンルにとっても、当該社会に対する内外からの理解にとっても、いかに重要であるかという点。第二は、英語文学の背景にある近代イギリスのはらむ諸問題に、実はわれわれ読者が相当無知だという点。第三は、その日本の読者が近代あるいは近代以降に頭までつかった状態にいるため、改めて近代を問い直すということを怠っているという点だ。

第一の点については、チヌア・アチェベの『部族崩壊』やクシュワント・シンの『デリー』を読むことで、理屈でも現実でもなく、小説を通して自国以外の近代化の生々しさを疑似体験

できる。その時、著者が第Ⅱ部第三章で展開する諭吉、漱石、龍之介の三人の「西洋化」(著者にとっては近代化)と「キリスト教」に対する姿勢の分析が、ナイジェリア、インド、日本を問わず、およそ近代を考察する上で格好の先例を提供する。

第三の点については、フレドリック・ジェイムスの『近代という不思議』やエマニュエル・トッドの著作群を意識的に読むことで不足を補えるかに見える。その時、本書の近代についての時代区分の安定感(本書137頁、以下頁数のみ表示)は、問題をいたずらに複雑化することへの警鐘となる。著者は「キリスト教」こそ「西洋の文化・文明の核心」にあるとし、この核心に一気に突き進む。

そこで、第二の点だが、これは問題が深刻であり、正視するには覚悟がいる。深刻というのは、本書に説かれている「キプリングの帝国主義の根底にカルヴァン主義がある」(85)といった主張を読み、日頃の小説の読みの甘さを思い知らされるからばかりでなく、「日本におけるキリスト教信者数の〈人口比一パーセントの壁〉」(132ほか)を入口に展開される著者の宗教論が、年中行事で複数の宗教に屈託なく接する日本の読者を、根源的な思索に引き戻すからだ。人は個人レベルの近代化と形容できる学校教育を終えるや、社交に政治と宗教は禁物というプロトコールのためばかりではなく、誤解をかかえたまま双方に深く立ち入らなくなる。

本書の圧巻は、著者が長い体験と考察の末、「三位一体の神の正体を理解する手がかり」を「キリスト教の救済論の構造」(129)に見出し、懇切丁寧に解説した上で、「第二ヴァティカン公会議から宗教間対話へ」という一章で、「キリスト教以外の諸宗教に対する教会の態度」、カール・ラーナーがカトリシ

ズムの「排他主義」を「包括主義」というかたちで克服した事情、そしてジョン・ヒックが「宗教的多元主義」に至った事情を緻密に説いているところにある。著者はそれを分かりやすく、しかも凝縮したかたちで書いているので、再読三読の上、この、時に先送りしがちな問題への理解を深めたいところだ。

この峠を越すと、残るは第 III 部。「わが 19 世紀イギリス史研究」という個人の研究史や書評が中心なので、とても楽しくためになる。松村昌家著『水晶宮物語』を語りつつ自らの学問観を織り込む手法は書評執筆の手本になるし、『インドとイギリス』の著者吉岡昭彦に対する著者の「敬愛」表明(236)は、見解を異にする同時代人に恵まれることの幸運を示して余りある。著者が「チャーチズム」研究の結果、それに「ビクともしない」「強固な支配体制」の研究に向かうところも見逃せない(231)。

評者はイギリス、日本、近代の三語が一冊のタイトル上に会した本書を知るや、それを手にする前にかかなりの興奮を覚えた。副題にキリスト教の文字を見てさらに期待感が増した。近代化途上を映す英語圏文学を通じ、仏教、イスラム教、ヒンドゥー教、シーク教など複数の宗教に触れるにつけても、キリスト教理解が不可欠だからだ。老練な学識と若々しい感性のバランスを本書に見た。(ミネルヴァ書房、2009年11月、A5判256頁、5,000円)

—— 梅 正行 (中京大学教授)